

小詩會詠草 : 文苑

著者	夕闇, 星陵, 野人, 聖花, 芒村
雑誌名	龍南會雜誌
巻	106
ページ	37-39
発行年	1904-05-25
その他の言語のタイトル	小詩会詠草 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5697

小詩會詠草

○樂聲

あけぼのを迎へて高き樂の音廣野の花の精をさますか夕闇
 春の夕おのづとされし琴の糸の乱れ心地に雨の音さく星陵
 これのみの形見の笛やとり出でくひやかぬ音をし獨り忍ばむ野人

○河

わか戀ふる山の緑に命待てとはにさくやく野のいさよ川夕闇
 春若き姿朽ちざれ野の川にふとうつしたるわが水鏡星陵
 花一里舟漕ぎ上る夕ぐれに星影うすく水にくたくる聖花

○春思

行く水に散りゆく花に若き身の春は思のいかでなからむ芒村
 春はたゞただとこしへの命なりうれひの曲に榮葬るな夕闇
 草にねて雲流れゆく空をみよ春の思はとことばにわく聖花

○若草

みどり野にもゆる若草たばる夜はいかなる夢の影宿すらむ芒村
 うらぶれてイむ野邊の新草や昔の夢のまたわなかへる野人
 歌の譜を若草の野にひめわきて水に下りたつ鳥うつくしき夕闇

天地も神の恵の春にあひて榮ゆるはしき若草の色 聖花
 ならばるれよ若き小草に籠りたる夢が香きかむちさき胡蝶に 星陵
 あたゝかき神の息吹にもゆるめて香漂ふ野邊の若草 野人

○劍

夜の幕のかけきゆる所野にたちて劍あらへば水に影あり 夕闇
 血に餓れて冷ねし劍よ魔のあらぶ叫びきこてや夜に鞘ばしる 星陵

○旅

花野ゆく旅の若人新らしき小笠にかきし歌筆細き 星陵

○浪

夕月の磯によりきし流れ葉の末の運命は浪のさゝやく 星陵
 あげぼのゝ浪わきかへるわたづみの千尋の底に樂の音ぞする 芒村
 夕なく沈む夕日を吊ひてほるびをうたふ岸のさゝなみ 野人
 靈の水森を流れて常夏のうたをさゝやくさゝなみの音 夕闇

○城

もやに高き若葉の城のふもと原驢馬の鈴の音遠く消行く 星陵
 幾春か廣野の主と仰がれし夕日にはゆる名なし古城 野人
 うす月の影はのかなる夕空に淡く浮べる高館の城 芒村

○新 緑

新しき匂みなさるみどり野の高き息吹に月はくもれり 芒村

さびは梅に榮は櫻にきくわたり若き緑に命得しわれ 星陵

よもすから青葉の風にイみて葉守の神のさくやきくかむ 野人

新しき森の緑をついばみて夕うたなき鳥のかげかな 夕闇

○潮

夕べ重き春の潮の音にきけよ海なるうたは皆こゝにあり 夕闇

海原の底の宮居の春のうたかあしたわき立つ潮の音ぞする 芒村

海底の春美しや櫻貝潮紫のどばりかゝぐる 星陵

○小詩會に入會を希望せらるゝ方は編輯室内田まで申込まれよ

正 誤

前號俳句欄に於けるさもし火會吟草中夕闇翠琴藤坊春の子等の作は皆紫溟吟社の吟草に入すべきものあるを誤て混同したる由前編輯委員より申し來たればこゝに正誤を置く